

ずいそう

## 前立腺迷走記

渡邊直樹



体や健康の内実は個人情報取り扱いの中でも極めて慎重さが求められるが、自分のことを自分で披露するのだから問題あるまい。自分が未だに振り回されている前立腺の病のことについて紹介する。年齢を重ねると皆さん同様の悩みを抱えることもあろうかと参考になればと思いつつ、私より重い病状で悩まれている方は不愉快に感じる内容かもしれない。ご容赦いただくとともに適宜スルーしてもらえれば幸いである。

さて、自分が初めて前立腺なるものを認識したのは今から25年ほど前、三十代後半の頃だった。どうも下半身に圧迫感を感じ、大事なところを軽くつままれているような違和感もあって、当時地方勤務だった町の一番大きな病院を受診した。若い医者はすぐに前立腺を疑い、触診（肛門に指を差し込み直腸壁を押して前立腺の感触を探る）した上で肥大気味なので薬を出すとのこと。セルニルトンという漢方薬のような症状緩和薬を飲むと一ヶ月ほどで違和感は消え、触診の感触だけが生々しく脳裏に刻まれたまま前立腺肥大については記憶の彼方となった。今思えばPSA（血液検査による前立腺の腫瘍マーカー値）すら調べなかったように思う。

それから時は流れ流れて五十代半ば。激務のポストから解放され新たな部署での5月の連休明け。再び男子の大事な部分に違和感。しかも尿の出が少し悪い。さすがに放置できず職場の診療所を受診するとやはり前立腺だろうとのこと。ちょっと期待？していた触診は無しでPSA検査をすることに。薬は「そういえば昔も飲んだなあ」と思い出したセルニルトンが処方される。数日後検査結果を聞きに行くとPSAの数値が24もあるそうだ。医者曰く「専門じゃあないけどこれは大変だよ」と妙に脅す。なんでも標準は2以下（最近では4以下らしい）で、それを上回ると前立腺癌の疑いがあるという。青くなって紹介状持参で近くの総合病院の泌尿器科にすっ飛んで行った。

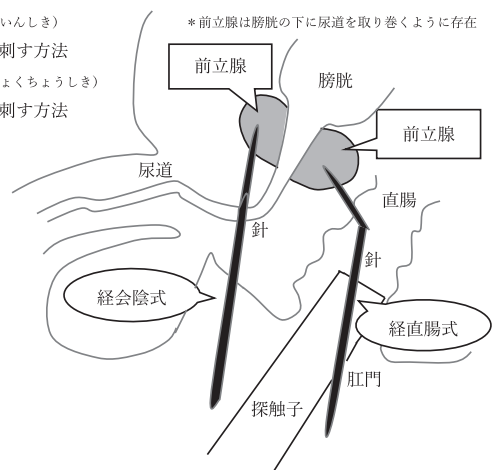
こちらはさすがに専門なのでそれほど脅しはしないが、とはいえ生検はマストだと言う。MRIを撮って怪しげなところを予めチェックした上で、そこも含めて前立腺全体から十か所程度組織を取って調べるとのことだ。経験者の方ならお分かりだろうが正直かなり

の苦痛を強いられる検査である。下半身麻酔で肛門経由直腸から針を差し前立腺の組織を採取、検査後は尿道に管を通したまま一晩入院するが、退院後もしばらくは血尿が止まらない。自分は翌早朝に挿入管周辺の激痛！に耐え切れず早めに管を抜いてもらったこともあってか、その後尿道に血の塊が詰まって尿が出なくなるなど散々な目に合った。医学の発達した今日、まだこんな検査があったのかと、当時もう二度とご免だと思ったものだ（図—1）。

その結果がん細胞は見つからず前立腺肥大との診断。以降セルニルトンを飲みながら通院、定期的にPSAをチェックし様子を見ることに。ちなみに前立腺の体積は70CCと通常の3～4倍まで肥大していて、PSAは15前後と高値安定が続く。ただ、採取した箇所と箇所との組織に癌細胞が存在することもあるという。そう聞くと何やら心配になり町医者で評判の良い泌尿器科医にこっそり相談する。そこでもMRI検査をしたりとしばらく二股をかけていたが、結局は町医者も肥大で様子を見て良いとのこと。癌ではないとようやく納得し、妙に嬉しくて自らお祝いと称しバカ高いスピーカーを買ってしまった。

そうこうしながら数年が経過した一昨年、総合病院の泌尿器科の医者から自宅に電話がかかってくる。「PSAの値が上がってるから予約を繰り上げ早めに受診しなさい」と…総合病院の医者から直接自宅に電話

- ・経会陰式（けいえいんしき）  
体の外から針を刺す方法
- ・経直腸式（けいちよくちようしき）  
直腸壁から針を刺す方法



図—1 前立腺針生検ボンチ絵

なんて普通じゃない。それ見たことか！数年間漫然と通院しながらも「たまにMRIでも撮ってくれませんか？」と持ち掛けると「MRIじゃ分からないから心配なら生検しますよ」が医者の方の口癖。さすがにこうなるともはや生検必至だが、その前に例の町医者の意見も聞いておこうと再び相談。こちらは「じゃあMRIを撮ってみるか」と言ってくれる。賛成！これは痛くも痒くもないので即お願いすることに。

ところが結果を聞くと、な、なんと「前立腺の左側下部に癌の疑いが認められる」だって。検査医師も同意見でほぼ間違いのないと言う。まだ小さいので全摘すれば大丈夫だからと妙な励ましを受けつつその箇所限定の生検で最終確認するとのこと。ピンポイントで組織を取る検査機器のある某総合病院に紹介状を書くそう。自分としてはこの流れでもうおまかせという気には既になっている。何と言っても癌の一言は重いのだ。

さて、話がトントン拍子に進むのは助かるが、今まで通っている総合病院の医者には断らなければあまりに仁義、礼節を欠く。その旨町医者に話すと「ああ、彼知ってるので僕から電話してあげる。待合室で待って」と。ホッとしつつ再び診察室に呼ばれると「やっぱり今通ってる所に行ってお下さい。こっちのデータも全部持ってって」ときたもんだ。元よりうちの患者だぞ！とでも言われたのかな？

バツが悪いけど改めて総合病院に顔を出す。引き継いだ画像を見た医者も「まだ小さいから大丈夫。癌にも種類があるからまず組織を取って調べるから」。長年世話になった医者を信用しないわけではないが若干懐疑的な思いも正直ある。ここまで来たら心機一転ではないがどっか別の病院でやってもらおうと、実は私、決心していた。意を決してそう切り出すが「うちにもいい機械はあるし癌だってたくさん手術してるから」と相手も譲らない。そこを何とか押し倒すと大学病院の泌尿器科を紹介してくれた。この医者の出身大学で

先の町医者とは学校が違ったみたい。なるほど、それで簡単にハイとはならなかったのか。

大きいやや暗く陰鬱な雰囲気のある大学病院に行く。その医者も画像を見て「まだ小さいし転移もしていないようなので全摘で根治できる。まずはMRIを撮ってから生検へ」と予想していたとおりの。「怪しいところに絞って検査してくれますよね」と少しでも生検の負担を軽くしたい自分は町医者のコメント受け売りで聞いてみるが「いや、うちは全部からまんべんなく、外からも針刺して取るの。もちろん気になるところも取るけど」ときた。やれやれ覚悟を決めるしかない。ところがだ。手術室のベッドで麻酔の直前、生検担当医師に「例の怪しいと言われてる箇所からも必ず採取してね」と念押しすると「うちのMRIではそこは怪しくは映ってないなあ…」???この期に及んで一体なんなんだ！「左下からも必ず取ってくれー」との悲鳴を残しつつ検査はスタートした。

検査自体は術後も含めて昔より少しはマシだったが、生検した医者も「早めに結果を聞きに来た方がいいから」とやはり当確っぽい物言いだだったのでこちらも腹をくくる。前立腺摘出後の尿漏れ対策バンドやおむつなどいろいろ勉強しつつ、勇んで？結果を聞きに行くと「癌は見つかりませんでした」…「すっかりその気で来たのに！」と食ってかかるが医者は「こっちもそのつもりでいたんだが」との返事。さんざん迷走した挙句、結局肥大の治療継続と相成った。

前立腺の体積はもはや90CCだそうで、尿道を広げて尿を出やすくする薬に加え昨年秋からは肥大した前立腺を小さくする薬を使い始めた。長年世話になったセルニルトンはもはや必要ないとのこと。「セルニルトンって効いてます？」と医者が聞くので「ずっと飲んでるので分かりません！」と答えた結果である。ちなみに新たに飲み始めた薬は男性ホルモンを抑制するため発毛効果があるらしい。うん、これは朗報ではある。最近ではレーザーや蒸気で組織を蒸発させるなど術後の影響の少ない手術もあるようなので聞いてみると「うちは肥大の手術はしてません！今はいい薬があるから。どうしても手術したいなら系列の病院をいくらでも紹介するけど」…大学病院はやはり権威があるのだ。

果たして自分の前立腺はこの先どうなっていくのやら。少し深酒すると尿が出にくくなるし夜中に何度もトイレに行くのは当たり前。逆に催すと今度は我慢するのが大変だ。座ると前立腺を圧迫するので長い会議や車の長距離移動も良くないらしい。そして何よりあれだけ言われたのだ。本当に癌はないのだろうか？と

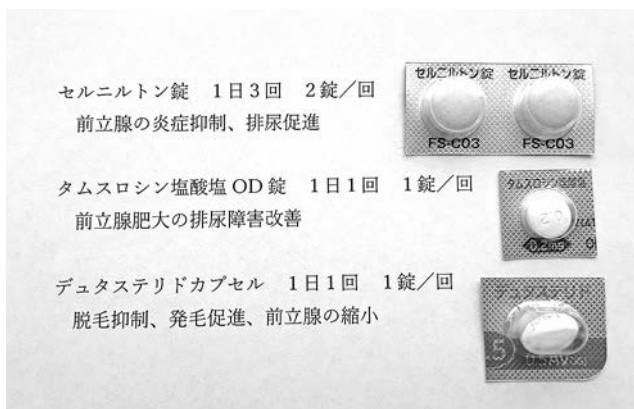


図-2 服用薬一覧

いう不安は当然まだある。ただ、まあ、ここまで来たらあきらめ？も肝心かなと。自分の優柔不断さゆえ医者の方には諸々失礼をしつつ得られた教訓は「セカンドオピニオンは大切だけど結果によっては思わぬ迷走をすることもある」であった。ところでここまで

読んで「前立腺って何よ？」と言う方、少々照れるのであえて記載していません。恐縮ながらネットでお調べ下さい。

——わたなべ なおき 岩田地崎建設(株) 取締役専務執行役員——

